

# Gikyohan Timese

No.0011

岐阜県教販通信

2021 年 4 月発行

## #教師のバトン

当社は岐阜県の全小中高校に教科書を供給し続けて 100 年以上の会社です。当社は岐阜県の全小中学校に「SCHOOL e-LIBRARY」進呈させて頂きました。配送も終了しました。新学期にはいりタブレットが本格的に稼働しているかと思います。電子図書よって新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となればと思います。購読リストに洋書が続々UP しています。ぜひ英語教育にも役立てて頂ければ幸いです。（別添資料参照）尚、商品の詳細情報は当社 HP (<http://www.gifukenkyohan.co.jp>) のバナーでご確認できます。岐阜県教販通信のバックナンバーも HP に記載しておりますのでご覧いただくと幸いです。



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952 年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でならし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

文部科学省が 3 月 26 日から投稿を募集した「#教師のバトン」プロジェクトが、Twitter 上で「炎上！」と報道されている。

このプロジェクトは、文部科学省の説明によれば、「多様な学校で行われている創意工夫や、決して派手ではないけれどちょっと役立つイイ話、教師の日常などを共有し、全国の教師や教師を目指す方へ広げる場を作る試みです」とある。さらに、「全国の学校現場で奮闘する教師の皆さんの取組や後輩へのメッセージなどを #教師のバトン をつけて投稿することを呼びかける、新プロジェクトを開始しました！投稿を通じてこれから教師を目指す若者にバトンを繋ぐプロジェクトです」ともいう。

要すれば、教師として頑張ろう！ という気になれるようなエピソードを募集したわけだ。ところが、蓋を開けてみると、ネット上では 9 割以上が「何やってんだよ文科省！」「他にやることがあるだろ」との反対意見だという。#教師のバトンの投稿も、長時間勤務の実態や部活動指導の重い負担を訴えるものなど、厳しい勤務の実態を訴えるものが圧倒的に多いと報じられている。たしかに、「イイ話」を求められても、ブラック労働と言われている状況からすれば、それどころではないという思いを抱くのも無理はないだろう。ただ、現場の厳しい勤務実態については、既に文部科学省も明確に認識し

ている。2016 年には大規模な教員勤務実態調査を行い、その非常に深刻な結果を公表している。

だからこそ、教師の働き方改革について翌 17 年に中央教育審議会（中教審）へ諮問し、中教審は国と教育委員会に緊急提言を出すとともに、具体的方策をまとめた。18 年には、文科省より各教育委員会へ「学校における働き方改革に関する緊急対策の策定並びに学校における業務改善及び勤務時間管理等に係る取組の徹底について」の通知が出されている。

もちろん、これだけで解決できたわけではなく、その後も引き続き働き方改革の策が講じられてきた。そのひとつとして、今年度中に教員免許更新講習制度の見直しが行われる予定だ。それやこれや、わたしの知る限り、教師の勤務実態改善のために、これほど文部科学省が積極的に動いているのは初めてのことだ。

後輩を弁護するわけではないが、「#教師のバトン」プロジェクトは、こうした苛酷な勤務実態の一方で、それでも教師という仕事に魅力を感じる部分はどこなのか、どういう仕事上の喜びを後に続く教師たちに伝えたいのかを、直接現場から聞きたかったのだろう。ダークサイドを改善していく一方で、教師という仕事のやり甲斐を感じるファクターを集め公表しようというのではないのか。それはそれで、意味のあることだと思う。

岐阜県の先生方も、伝えたいエピソードがあるのなら、ぜひ投稿していただけないだろうか。また一方で、勤務実態等で文部科学省に訴えたい不満があるなら、それも投稿していただきたい。